

時事
川柳
井上万歩・選
リオ五輪聖火団長女性初
急がれる介護ベッドの事故多発
高齢に過疎化空き家も増えてゆく

諫早 古賀 哲子
長崎 矢坂 花澄
長崎 阿津坂貞和

無職 石丸 勇(66)

やつぱり一的中した。おかしい、おかしいと思いながら起業者に付き合わされてきた石木ダム建設問題。県収用委員会委員の任期満了を控えた感謝状贈呈式で、感謝状を受け取った委員が「阻止されたらどうんどうブルドーザーを突っ込んで、業者を入れさせないと」「機動隊を入れるかどちらか」と発言したという。再任された委員からも県に寄り添う発言があつたといふ。こんな血も涙もない人たちによって、いとも簡単に土地が取り上げられたのか。怒り心頭を通り越してあきれてしまつた。そもそも知事が選任

した委員に、強制収用に貢献したからと感謝状を贈る神経がどうかしている。それは知事自身がこの発言を容認していることにほかならない。

収用委員会は「公正、中立の第三者委員会です」と言つてきただから、感謝状は返納させるべきだ。ここ石木ダム建設問題に関しては、13戸が暮らす中、ダム建設では日本で初めて生活用財産の強制収用が行われている。てんびんの支点をずらし土地収用法を適用することは、日本国憲法の精神にも違反している。第三者委員会とは名ばかりの長崎県収用委員会は、直ちに解散すべきだ。(東彼川棚町)

公正さ疑問 石木ダム収用委

2015.10.30(金)長崎

記者の三

人生変わる『重み』知るべき

熊本 陽平 (東彼支局)

無関心の人たちを振り向かせるにはどうしたらいいか。東彼支局に赴任して10日余り。石木ダム事業関連の取材をするたびに考える。事業は反対地権者の土地の一部で強制収用が始まるなど重大な局面に入った。県と住民の間で絡み合つた問題の根深さに触れ、当事者間だけでの解決は困難だと感じている。

先日、事業に何十年も振り回されている住民の言葉に、はつとさせられた。「かつては『地権者』という言葉はあまり使われていなかつた。だけど今は『地権者』と『その他』の人たちと分断されてしまつてゐるようだ」。報道が彼らだけの問題にしてしまつていた側面もあつたのではないか、と考えさせられた。

過去の新聞記事を読み返し、なんとか「今」に追いつこうとしている現状では、事業の是非を語る気は毛頭ない。ただ、多額の税金が使われるとか、そういう理由だけではなく、県の事業で人生が大きく変わったがいるという『重み』を、県民はもつと知るべきだと思う。

ダムは必要か不要か。この単純な問題に対する難しい解答を導くには、世間の関心の高まりが不可欠。そのきっかけを提供するのが報道の役目だと肝に銘じておきたい。